

原子力戦艦アドルフ・
ヒトラー。先進11ヶ国
会議に出撃す。

イブ_ib

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1985年ドイツは原子力戦艦アドルフ・ヒトラーを完成させる。

翌年転移

やべーぞ異世界だ！豊富な資源だ！やったあ！

パーパルディア速殺！

フィルアデス、ロデニウス、グラメウス三大陸併呑！

先進11ヶ国会議に出ていいんですかあ！

グレートアトラスター！さあうちとやろやあ!!!

目次

原子力戦艦アドルフ・ヒトラー。先進	1
1ヶ国会議に出撃す。	1
先進11ヶ国よさらば！我が代表堂々退	
場す	7

原子力戦艦アドルフ・ヒトラー。先進11ヶ国会議に出撃す。

80cm主砲2連装8門4基を携え、追尾式対艦ミサイル、対潜ミサイル、対空ミサイル、迎撃機銃が針鼠の如く空を睨み、機関部はまるでヒトラー総統の心臓如く熱く激る原子炉が、我がドイツに仇なす者たちに対しての怒りの炎をあげているのだ。

時は1970年代、我らがヒトラー総統率いる大ドイツは世界を蝕んとするアングロサクソンの帝国主義者と寂れた寒地の共産主義者を征伐した民族生存戦争から20年。

偉大なる総統の友人にして英雄であるアルベルト・シュペアーが

創造したこの世界首都ゲルマニアの幅120メートル全長5キロの大通りを抜け、欧州大戦の犠牲者180万人の名が刻まれた凱旋門をくぐり抜け、2万人収容可能な映画館「ゲツベルス・ホール」（党員なら意思の勝利とオリンピックが無料で見られます）を通りぬけた先にある21階建の「ホテル・ゲルマニア」を眺め先の「アドルフ・ヒトラー広場」に入ると（アドルフ・ヒトラーと言う名は勝利と同じ意味である）という文字が彫られた台座に総統の像が立っている。

その先にある巨大な15万人収容可能な大ドーム「フォルクスハレ」にて満場一致で世界に誇る未曾有の巨大戦艦の建造が決められたのだ。

1985年

日本のかぐや10号による人類初の月面着陸が科学万博つくば、85のジャンボロンにて放送されている正にその時、その巨体に科学の火が灯ったのだ、その情報が発表され世界は驚愕した。

しかし翌年の4月の終わりにドイツの巨大な国土は忽然と消えてしまったのであった。



「第1文明圏トルキア王国軍、到着しました！ 戦列艦7、使節船1、計8隻！」

『了解、第1文明圏エリアへ誘導せよ』

港に着いた船を港湾作業員が適切に誘導していく。

「トルキア王国……アガルタ法国……ここら辺は代わり映えせんなあ……」

この港の責任者であるブロントは管理局の窓から港湾を眺めながら呟く。

列強国レイフォルの首都レイフォリアを艦砲射撃粉碎し、降伏せしめ第二文明圏を侵略し版図を広げるグラ・バルカス帝国。

もう一方で同じく艦砲射撃でパーパルディアの首都エストシラントを吹き飛ばし、

フィリアデス大陸、グラメウス大陸、ロデニウス大陸の三大陸を併呑した大ゲルマン帝国ことドイツ。

一体どんな艦隊を連れて来るのか、彼は楽しみでしようが無かった。するとプロントはあまりにも城のような船が水平線から現れるのを見た。

その姿は船が近づくとつれ、さらに大きくなりやがて神聖ミリシアル帝国の魔導戦艦を見慣れた彼でさえ絶句し、その雄々しきに見とれてしまうほど美しく、力強い艦が近づいてくる。

「グラ・バルカス帝国到着、戦艦1隻のみ」

「おおッ!!」

それを見た者すべてが感嘆する。

グラ・バルカス帝国の誇る、全世界最大最強の戦艦。

「なんて……デカイ砲を積んでいやがるッ!」

グレートアトラスターの46センチ砲に驚愕の声を漏らすが、彼等は直ぐに更なる恐怖を覚えることとなる。



「……ドイツ国……到着……戦艦1隻のみ……」

報告係は震える声で向こうからやって来る島を

皆にそう伝えることしか出来なかった。

原子力戦艦アドルフ・ヒトラー

全長600m 幅100m

80cm連装砲4基8門搭載

SAM8連装VLS8基

SSM3連装発射基6門

30mmCIWS6基

対潜ロケット砲4基

もう砲なんかいらんじや無いのかと思いたくなるぐらいの針鼠である。

兎も角して、これはグレートアトラスターのスペックだ。

全長263.4m

全幅38.9m

基準排水量64,000t

出力153,553馬力

一方、アドルフ・ヒトラーは

全長609.6m

全幅91.44m

基準排水量・492, 702t

出力498, 735馬力

大きさで言えばグレートアトラスターよりも一回りデカイのだ。

こんなバケモンが入れる港などなく、入り口近くに投錨して外交官は

用意されていた小型客船に移って港内に入って行くのであった。

「はははは……ははは……」

ブロントは猛烈なシヨックを受けた、こんなのに比べたら零式魔導艦隊など浮かぶ鉄屑の様なものではないか、先程衝撃を受けたグラ・バルカスすら霞む……。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

グレートアトラスター艦内

シエリアも含めラクスタル艦長以下の士官達はお通夜状態であった。

この会議で高らかに宣戦布告をするのだ。この日の為にシエリアは嘘くさい笑いを練習して来たのだ。何度職員にその様子を見られたか分からない、しかし恥を忍んで練習して来たのだ。

「それがなんでこうなったの……」

異世界という藪に近づいたら棒じゃなくて解体用の鉄球が飛び込んできた様な感じだ。

「というか諜報員は何を……やっていった！」

シエリアは激怒したが、情報が来ないのも無理はなかった。

なんせ最初に情報を送った諜報員は「こんなあからさまなプロパガンダ情報を送ってくんな」と相手にされず、次の諜報員は潜水艦で接近中に沈められ、3人目はゲシユタポにお縄である。それどころか潜水艦を拿捕され暗号機を奪われた事を彼らは知らない。

「ラクスタル艦長、このグレートアトラスターはあの怪物を沈めることは可能か？」

「赤子が屈強な兵士に勝てるでも？」

「そうだよな……うん、私は東征艦隊に指示を仰ぐ、それまで刺激する様な事は取らない様にしよう」

シエリアは降って沸いた最悪の事態を回避すべく行動を起こした。

先進11カ国よさらば！我が代表堂々退場す

「当初に想定していたよりもドイツの戦力が大きい為、フォーク海峡における作戦の見直しをして頂きたい」

グレートアトラスターからの暗号通信に東征艦隊司令アルカイドは首を捻る。

「ドイツか……あの国は小さな砲しか積んでない戦艦が殆どだと聞いたが？」

「……もしかしたら前々から言われていた『ビツク・バン』アドルフ・ヒトラーのコードネームなのでは？」

「いやまさか、あんなデカブツが存在するのか？ 物には限度があつて戦艦でもGAが

まともに運用できる最大サイズだろう。

写真にあつたような大きさの戦艦を運用するものではない、よほど狂つた国でもない限りな」

「ではこのまま作戦は続行しますか？」

「ああ、問題ないだろう。航空隊には念の為警戒するよう言っておいたほうがいいかな」



【作戦に変更なし、予定通り宣戦布告し戦闘を行う】

「そ……そんな」

シエリアは頭を抱え込む、しかし国がやれと言われればやらねばならない。

「ラクスタル艦長、作戦に変更はありません」

「そうか」

ラクスタルは一言呟くとアドルフ・ヒトラーのほうに目を向けた。



冒頭モーリアルより魔帝復活の予言について報告され、周囲がざわつく中ミリシアルから声が上がる。

「そのラヴァーナル帝国についてもそうだが、ドイツは即刻第三文明圏に対しての侵略行動を停止したまえ! 旧パーパルディア領および属領での虐殺行為についても目に余る物がある!」

「左様! それどころかミリシアル領海域にもドイツ軍が領海侵犯しているという!」

「偵察機と思しき飛行機械も報告であった、君たちはミリシアルと戦争がしたいのか！」
しかしドイツ大使は意に介さない様子で

「ほう！ それは何だというのか。ミリシアルもムーもパールディアもかつては領土拡大の為に他国に矛を抜けただろうに！ 何故我々だけ非難されなくてはならぬのか？ そもそも我々はこの世界に来て日が浅い、故に偵察機を飛ばし情報を集めている、それを非難するなら地図の一つでも提供したらどうだね！」
啖呵を切ると同時に机を勢い良くたたく。

「…………くッ」

「だいたいその態度はなんだ！ グラ・バルカスの大使を見てみたまえ落ち着き払っている！ 君達もドイツに転移国家としてアドバイスの一つでも言うといいぞ」

「エツアアア、ハイ！ ソウデスネ……スナオニナツタホウガ……」

いきなりのご指名にシエリアは片言気味に声が漏れ、それを見たドイツ大使は高笑いをする。

「フロイライン、同じ転移国家のアドバイスだが……仮面を被らない事だ。貴国の艦隊は既にココフォーク海峡に迫っている事は、偵察衛星で既に確認済だ」

「! なッ……何の事だ!」

「それと……貴国の乗って来たヤマト級、ああいや、グレートアトラスターだったな。それがフォーク海峡に蓋をする事も知っている。貴国が取ろうとしている作戦は我が諜報部によつて全部筒抜けなのだよ」

そう言うのと大使は勝ち誇つた様子で葉巻に火を付ける。

「フォーク海峡に艦隊が迫っているだど!! グラ・バルカス代表どういふ事か説明したまえ!」

「一瞬でも理性的な国家だと思つていた私が馬鹿だった!」

今度はグラ・バルカスに対して非難が集中するが、たまらずシエリアが発言する。

「まつて頂きたい! 先ほど言つていたようにドイツは第三文明圏で乱暴狼藉を働いております! そのような国家の出任せを信じるのですか!」

「お前らだつてレイフォル攻撃してたじゃねえか」

ドイツ大使は柄悪く吐き捨てる様に言った。

「聞捨てなりませんね! レイフォルの件についてはパガンダ含め向こうに非があります

！先ほどの言葉、我が帝国の侮辱として今ここで謝罪してもらいたい！」

それを聞いたドイツ大使はまるで悪質なクレーマーの言葉など聞く耳もたんと言わんばかりに、葉巻をテーブルに押し付け席を立った。

「ドイツ大使、無許可の離席はいけません、今すぐご着席を」

議長はスピーカーカーで注意するが大使は聞こえないふりして会議上から出て行ってしまった。

「あ、あの、えっと、皆さん……」

会場はドイツに対する憎悪とグラ・バルカスの説明を求める空気で充満しており、シエリアはただ心の中で泣く事しか出来なかった。